

神戸国際チェロフェスティバル レポート

7月26日～29日、記録的な猛暑が続く中、第1回国際チェロフェスティバルが国際チェロアンサンブル協会主催、日本チェロ協会後援で開催され、全国各地からチェリストが神戸に集合しました。高円宮憲仁親王殿下を名誉総裁に迎えて、4日間にわたったこの催しの最後を締めくくったのは、2回目を迎えた1000人のチェロコンサート。3年前の第1回目につき、阪神・淡路大震災の復興支援と音楽を通じての世界平和のメッセージを受け継ぎ、出演者715名、観客約2,300名で盛大に行われました。

期間中のスケジュールは以下のとおり。

- 1日目... オープニングセレモニー / ガラコンサート / オープニングパーティ
- 2日目... 公開レッスン / ワークショップ / チェロクリニック
- 3日目... リサイタル / ワークショップ / マエストロとの懇親会
- 4日目... リハーサル / 1000人のチェロコンサート

1日目～3日目は、1000人のチェロの公式練習も並行して行われるというハードスケジュールでしたが、参加者の方々は、エネルギーに各会場をまわり、チェロの祭典を存分に堪能されていた様子でした。

このフェスティバルにマエストロとして参加された齋藤建寛先生、会員の竹内幸美さんと末松悦子さんからの報告をご紹介します。残念ながら参加できなかった方々も大会の空気を感じてください。

神戸国際チェロフェスティバル・ 1000人のチェロコンサートに参加して

齋藤 建寛 (R・045)

去る7月26日から29日まで、国際チェロアンサンブル協会主催の第1回神戸国際チェロフェスティバルが行われ、私は会期中の講師として招かれた。講師陣としてはアメリカ・カナダ・ドイツ・フランス・韓国のチェリストも参加し、日本からは林俊昭氏と私の計7名である。講師はこのフェスティバルでは、「マエストロ」と呼ばれることになっているが、私には甚だ重く、また僭越な呼び名である。

フェスティバルではオープニングセレモニーを皮切りに、ガラコンサート、公開レッスン、講師7人のリサイ



タル、他に講師への奏法などに関する質疑応答の場であるチェロクリニック、ヨーロッパから優秀な楽器製作者を招いての楽器のメンテナンスなどのワークショップ、懇親会などが行われ、フェスティバルのメインは1998年以来、2回目となる「1000人のチェロコンサート」である。

わが国で行われたチェリストたちのためのイベントとしては、まぎれもなく最大級のものであるが、会場は神戸のポートアイランドの中央部で、ポートピアホテル、田崎ホール、国際展示場、ワールド記念ホールが隣接する絶好のロケーションである。会期中、中枢である事務局はポートピアホテル内に特設され、多くのボランティアの方々の好意で、てきぱきと運営されていく。ポートピアホテルには300人ほどの全国からのプロ・アマチュアのチェリストたちが滞在し、ロビーなどで楽器を手にして出会うと、どちらからともなく会釈をかわし、親しみのある雰囲気がかもしだす。それにしてもこの企画を実現に移された松本巧氏の精力的な実行力は尋常でないをつくづく思う。

さて、今回の「1000人のチェロコンサート」には世界15カ国から715人が参加、東京からもチェロ協会会員の方々が何人かおいで下さって嬉しい。どんな雰囲気なのだろうと未知の体験を想像しつつ、公式練習と本番の行われるワールド記念ホールのアリーナに足を踏み入ると、まず12パートに分けられた椅子と譜面台の数に驚く。設営の準備に、関係者の方々はどんなにかご苦労されたことだろう。やがて指揮者の山下一史氏が高さ約150cmの指揮台に立ち、練習が始まる。ともかく各パートの最後列は指揮台から数10メートルの距離があり、演奏するとパートの前方と後方の時間差がものすごい。人数のわりに合奏する音は、会場の広さのせい、ダイレクトでは

なく空間を一巡して伝わってくるような感じだ。最初のうちはなかなか各パートとのバランス感覚がつかめない。しかしよいよ本番の日、前日の練習での不安をよそに、クレンゲルの12重奏「ヒムヌス」の冒頭、バスから順番に静かに音が重ねられ、やがて温かくやわらかな響きが会場いっぱいになり立ち昇る。これだけの人数によってこそ生まれてくる響きというものがあったのかと思知らされた。

チェロは音域が広く、その音は人間的である。この魅力的な楽器であるからこそ、このような企画もまた実現するのだろう。チェロを弾いている人は老若男女を問わず、多くの人が自らの意志をもって、つまり奏でたいという欲求をはっきりと胸に抱いてこの楽器を選択しているのではないか。チェロへの愛情が、皆を調和というひとつのものに向かわせているのだと思っている。フェスティバルはチェリストたちの笑顔の内に幕を閉じた。心に残る4日間だった。

1000人のチェロコンサートに参加して —チェロを愛する一医師の経験から—

竹内 幸美 (R・185)

私は、今回のチェロコンサートの内容に関しては別の方がレポートしたり、テレビの放送もある為、敢えて細部に触れず一参加者という視点から、特に通常は医師として患者さんに接する者が、日常を離れ、どのような体験をし、どのような印象を持ったかを出来るだけ率直な形で表現することにした。

< ささやかな日韓交流 >

今回、この国際チェロコンサートに参加し、韓国の若者と話す機会があった。それは、私が新潟から最終便で伊丹飛行場へ着き、あとはホテルへ直行と思った三ノ宮駅のタクシー乗り場から始まった。タクシーに乗りかけた時、車の脇に二人の若い女の子が立っている。私がチェロケースを抱え「ポートピアホテル」と言った為、同じ千人チェロに参加すると分かったとの事であった。そこですぐに、遠慮しないで一緒にどうぞと同乗して頂いた。車中では英語で、チェロを専攻している音大生であること、熱心な指導者の話、同じ学校から多くの学生と一緒に参加していること等を話した。程なくホテルに着くと、二人共、はにかみながら今自分達が買ってきたマクドナルドの袋を御礼にどうぞと差し出す。私は同じ会に参加するので、年長者でもあり当然の事をしたまめと言うも、タクシー料金の代わりに差し出された為、空腹も手伝い、有難く頂戴することにした。更に翌日合同練習の為、あの広いワールド記念ホールに入ると、真っ先に件の二人が昨日の御礼を人なつこい笑顔でニコニコしながら述べに来られ、しばしの歓談をした。

この二人をみて、私は同年令の自分の子供や、職場の同世代の看護婦等の従業員と比較してしまう。国は違えど、はるかに現在の日本には乏しくなった一般常識と礼

儀正しさのある彼女達にびっくりした。

また、本番前日の、懇親会では Prof. Na Duk-Sung の飾らないざっくばらんな物腰と、ドイツ留学中の娘さんともお話ができ、大変楽しい一時を過ごす事が出来た。

私は両国間での不幸な歴史によるわだかまりも、このような飾らない、素朴で地道な民間交流、とりわけ音楽やスポーツ等の文化的交流を続ける事により、時間はかかっても必ず氷解していくと確信した。とくに今回チェロについてはカザルス以来、日本でも藤原真理さんの地雷撲滅の為のボランティア活動を始め、平和的社会的活動に多くの巨匠がこれまでも貢献してきた。この同じ楽器を愛する者として、お互いの間に難しいことを語るための言葉は不要であり、改めてチェロの持つ素晴らしさを思い知らされた。これまでは、言葉を介しての交流しか知らなかった私にとって、大切な隣人と理解し合えた新鮮で貴重な体験であった。

< 公式練習の思い出 >

1000人のチェロコンサートでは本番出演の条件として4回の公式練習参加がノルマとなっている。私の場合、新潟からは、唯一の参加者である為、一人で金沢、横浜、山形、そして神戸とジブシーの如く土日を使用して、見知らぬ人達との練習に参加した。とくに暑い時期でもあり、チェロをかついで、一泊二日分の荷物を持って移動することは、大変体力を要することであった(改めて、世界中で演奏活動をするプロの方の体力と気力に尊敬の念を払うばかりである)。しかしこの練習会場でも遠方からきた変なオジサンチェリストを暖かく迎えてくれた。

私はこの公式練習の中で一人の素晴らしいコンダクターに親しく御指導頂く機会を得た。その人は副指揮者の石川真也先生である。この方は、とにかく大変熱心である。公式練習も多い時は100人近く、少ないと、何と山形では12人という事もあった。従って山形では1人1パートになってしまった。しかしこの山形での公式練習が、図らずも今回最も思い出深い練習となった。大変暑く、前日の横浜から引き続き、山形での練習に加わった。夕方練習が始まった。例によりクレンゲルのヒムヌスから始まった。しかしどうも練習の雰囲気がいつもと違う。前にいる同じパートの人は誰もいない。一小節前に弾き始める12パートの人は何と私の後に陣どってしまっているのではないか。結局私は、一番前で石川先生と殆どマン



ツーマンになってしまった。もう逃げられないと観念した。緊張し、暑い中冷汗と油汗をかきながら弾いた。やがて「第九」に入って、夕立ちが降りはじめた。そして突如激しい稲光りと共にすぐ近くに落雷があり、電気もチラツキはじめた。この時、真ん前の石川先生はびっくりされ、一瞬よろけながらも尚、指揮を続けられていた。嗚呼、まさしくベートーヴェン、第九、歡喜の歌である。少人数で演奏者数不足を補う為、ティンパニー代わりに雷を落としたのであろうか。それとも天の喝であったのか。ベートーヴェンにつきまとう運命的で悲劇的な側面もこのように突如、人間を襲うのかしらと思われた。地震や雷だけでなく自然とはやはり恐いものだ。しかしかくも苛酷な自然現象の中で、石川先生から集中的個人教授を受けることが出来たのは、本当に幸せな体験であり、山形の公式練習の場所を心良く準備提供して下さった増川誠氏の寛大なる人柄と共に忘れることが出来ない。

<癒しとチェロコンサート>

あの震災から早や6年半が経過し、神戸は部外者にとって、魅力あるきれいな街に戻ったかに見える。しかし、タクシーの窓外に見える今尚残るビルの壁に、震災後の修復の跡が、悪魔の爪跡の如く無残にも残っている所も散見された。これは、人間の受けた思いもよらぬ天災により人々の心の中に残った心的外傷の具像化ではないだろうか。

又、物理的な物は、仮に100%近く修復し得ても心の傷は簡単に時間の経過のみで癒せるものではない。今も世界各地で起こる同様な天変地異が人々の精神的安寧を揺さぶる。又、天災に限らず同様な現象は人災でも、例えばハワイ沖のえひめ丸転覆事故で何の罪もない被害者の心の中に深い傷を作ってしまうというような不幸な事件が後を断たない。

さて、音楽療法の観点からみると今回のアンサンブルを始め、このような音楽活動は、心的外傷を癒す手段の有効な一つになると思われる。それは、人間の情緒的な面に対し癒しを施す為、どんな美辞麗句、慰めの言葉より、言葉を介さない音楽という手段が右脳を介し、文字通りボディソニックとして人の心を揺り動かすのである。このような点でも、チェロはあのカザルスカザルスの平和活動以来、多くのボランティア活動の一つとして医療機関や福祉施設でも、現在盛んに行われている。私共の福祉施設でもプロの演奏家とりわけチェリストの弾く「ふるさと」に、痴呆の人が口ずさみ、また多くの人が涙するのである。一方、私自身今回のコンサートの曲目の中にもどこか演歌調でこぶしをまわして歌うところもあり、弾きながら陶酔感にひたることもあった。この言葉の要らない(あるいは言葉では成し得ない)しかし極めて説得力のあるチェロを今後とも続けていきたいと強く感じたものである。ところが、私共の人生はオセロゲームの表裏と同じくいつ逆転するか分らない。人を癒す弾き手も同じ弱い人間である為、弾く側も時に演奏しながら、美しいハーモニーやメロディーにより、心が癒され、多くの重い荷物(悩み)をその一瞬だけでも忘れることが出来るように思えた。今回長いコンサートの最後に漸く

このフェスティバルの様子は、次の日時にテレビ放映が予定されています。

「チェロ1000の響き」

～第1回神戸チャリティーコンサート～
衛星第2 9月24日(月)10:00～11:15

「祈りのチェロ 神戸から世界へ」

衛星第2 9月16日(日)8:05～9:00

「鳥の歌」にたどりついた時、これまでの色々な思いが浮かんで来て、涙腺がゆるんで来たのは、私だけの体験だったであろうか。何れにしても数年に一回の大きなイベントに参加して、癒す側にも癒される体験のある事を強調しておきたい。

以上、今回神戸で催された、1,000人のチェロコンサートに参加した一人のアマチュアオジサンチェリストの感想の一端を述べた。

今回チェロの持つ特性、とくにチェロ一本あれば、あとは言葉はいらない。人々を癒し、又癒される心優しさ

と奥の深い楽器であることを改めて感じとった。
今後医療という多くの人と接する日常業務の中でも、ミッドナイトチェリスト(あるいはサンデーチェリスト)として、可能な限り時間を見つけ、チェロの練習を積み、多くの国の人や、色々な場面、状況の中で演奏出来るよう頑張りたい。しかし正直にいうと、今も多くの荷物を背負いながら歩む毎日であり、所詮「芸術は長く人生は……」か、とくじけそうになることもある。それでも今回のチェロアンサンブルに参加したお陰で多くの人々と出会い、色々なことを教わった。そして少しばかりの勇氣も心の中にプレゼントされた一夏の素晴らしい経験であった。

最後に、心から、感謝を込めて1,000人のチェロコンサート万才!! と叫びたい。

「生きててよかった」 チェロ三昧の神戸レポート

末松 悦子 (R・143)

去る7月26日～29日、第1回神戸国際チェロフェスティバル、および第2回1000人のチェロコンサートが行われた。

26日、午前中に食事の後片づけ、洗濯、留守中の買い物、犬の散歩などをあたふたと済ませ(主婦が家を空けるとなると大変なのです) 昼過ぎの新幹線に飛び乗ったらあっという間に神戸についた。

受付をすませると渡された袋の中にはチェロの形をしたうちわが入っており、裏には全参加者の名前が印刷されている。蚤より小さい字だとはいえ、時間をかけて自分の名前を見つけたときは妙にうれしい。

さて初日のプログラムは開会式に続いて、マエストロたち(シュテファン・ハック、林俊昭、ジョン・ミハエ

ル、エレン・ガーニエ、斎藤建寛、ナ・ドクソン、オディール・ブーラン)によるガラコンサートが行われた。マエストロが次々と舞台上に現れて、小品1~2曲を演奏する。人によって楽器の構え方から右手の奏法、ピブラートのかけ方、そして何より音色が個性的で全部違う。ふつうチェロのリサイタルと言え、1人の人が最初から最後まで弾く。ところがこのコンサートは、タイプの違った極上のごちそうが次から次へと目の前に並べられ、それらを一口ずつ味わう懐石料理のような印象。なんとという不思議なひととき。これは私の長い人生の中で初めての経験であった。

翌27日は朝から午後にかけて公開レッスンがあった。私は最初にドヴォルザークのコンチェルトを聴いた。「普段、家で練習している時の音と、このようにホールで弾く時の音は響きが違うし、伴奏がピアノとオーケストラではまた違うから、その時々で自分の音を作っていかなければならない。」といったようなアドバイス。次にバッハの無伴奏6番のレッスンを聴くと、「違う版を比べたり、有名なチェリストがつけたボーイングを弾き比べてみると、勉強になるよ。」との話があった。

公開レッスンはこの日、3カ所で行われており、あれも聴きたい、これも聴きたいと魅力のあるものばかりだったが、如何せん身体は一つなのがくやしい。それに私は午後からの公式練習を2回とも出なければ、ノルマの4回を達成することができないため、後ろ髪を引かれる思いで練習場に向かった。

私に割り当てられたのは5番パート。5番はクレンゲルの讃歌ではメロディを弾くため、事務局長の松本さんからは「5番チェロは参加料金倍です」(ほねっこゴンのCM)とおどかさされていたが、幸いにして追加料金をとられることもなく練習が始まった。

海外からの参加者にとっては初めての合同練習だったが、印刷ミスやボーイングの変更情報がまだ行き渡っておらず、みんなウロウロ。とても音の強弱までは手がまわらない。困った指揮者の山下一史さんはPの指示を出すのに指揮者用テーブルの下にしゃがんで身体を隠し、右手首だけをテーブルの上に出して、小さくピョコピョコと振った。効果はすぐに現れた。「手は口ほどに物を言い」は指揮者の真髄なのかもしれない。

各国メドレーは繰り返し記号とダルセーニョ、コードがごちゃまぜで順番を覚えるのにひと苦労。また第九はオケでチェロパートを弾いたことのない人にとっては慣れるまでに時間がかかる内容だったが、管と歌が入れば



何とかなるだろうという不確定な希望を抱いて練習を終わった。

28日はなんとといっても、11:30 amから5:00 pmまで休み無しのぶっ通しで7人のマエストロたちのリサイタルがある。これを聴くために早々に練習ノルマをこなしたんだもんね。曲目もベートーヴェン、R. シュトラウス、ドビュッシー、ショパン、バーバー、ショスタコーヴィチ、ブラームス、グリーグ、それぞれのソナタ、ポッパヤブルッフの小品、黛敏郎からピアソラまで、弾く方も難曲だが続け様に聴く方もかなり大変という嬉しさと疲れがミックスしたため息のするようなプログラムだ。私の頭のなかにはさまざまなチェロの音色が響きわたり、そのうちに両耳サイドがくぼんで頭がチェロの形に変形してしまうのではないと思われるほどだった。しかし、しかし、何というぜいたく。こんなことをしてはパチがあたるのではと考える私は古い人間(?)。演奏時間がのびのびになって、夕方からの練習の集合時間がきてしまい、最後のソウル・チェリステンの演奏が聴けなかったのはとても残念だった。

この夜は練習の後、マエストロを交えての懇親会があった。和気あいあいの気さくな雰囲気、私はつい林俊昭先生に「先生はお顔が小さくていらっしゃるから、弾いているとき、左手の方がお顔より大きく見えましたよ。」などと、後から考えれば失礼なことを言ってしまった。林先生は「あはは。僕、手だけは大きいんですよ。」と笑いながら手を広げて見せてくださったが、もしかしたら、こめかみに『怒』マークが出ていたかもしれない。

高円宮殿下もオレンジ色の大会ボランティアTシャツをお召しになり、にこやかに歓談の輪に入ってくださいました。「いかがですか」と差し出されたサザエさんクッキーの箱の中をのぞいて「(猫の)タマはいますかねえ。」とタマのクッキーを見つけ、「これは子供たちのおみやげにします。」とズボンのポケットにしまわれた。「殿下もどうぞ召し上がってください。」と勧められて、「じゃあ、私は波平にしましょう。」とおっしゃり、こうして恐れ多くも波平さんは殿下の口の中に消えたのであった。(ちなみに私はワカメちゃんを食べた。どーでもいいことだけど。)

29日のコンサートは高円宮殿下と内親王様たちも一部加わって演奏してください、とにかく無事に終わった。最後にコンサート後の打ち上げで拝見した高円宮妃殿下の装いのレポートをしておきたい。妃殿下のスーツは茶とベージュのツートンカラー(楽器の色)で、上着の前面に大きなfの字がデザインしてあり、fの曲線の両端にボタンがついていて一目でf字孔とわかる。左胸にはチェロの形のブローチが2個、片方の耳にヴァイオリン、もう片方には弓が揺れるイヤリングをなさっていて、「娘たちに練習させるのがひと苦労なの。」と、ちょっと困ったような表情で話してくださいました。

フェスティバルの期間中、この他にも楽器製作者によるワークショップ、楽譜やチェロ付属用品の販売などがあり、まったく飽きることも無く4日間を過ごすことが出来た。プログラムの最後を見ると、この催しを成功させるために、いかに多くの会社や組織、そしてボランティアの方々が協力を惜しまず支援してくださったのかがわ

かる。私は何もお返しをすることができないけれど、心からの感謝の気持ちを皆様にお届けできたらと思う。

「関係者の皆さま、お世話になりました。本当にお疲れ様でした。」

チェロのメンテナンスについて

会期中に常設されたワークショップの中から、チェロのメンテナンスについて、Felix Krafft さんのパンフレットより抜粋して、ご紹介します。

チェロに起こるトラブルは楽器製作者の手にゆだねるべきものがほとんどですが、中には自分で出来ることもあります。

駒

チューニングによって駒が垂直ではなくなり、傾いてくることがあります。駒の脚がぴったり表板に接しているかどうかをチェックして下さい。傾きが目で見てわかるようであれば、次の事を試してみてください。

- 1) テールピースの下にTシャツや厚手の布を敷きます。
- 2) 両膝の上にチェロを安定よくのせて、両手で注意深く駒を動かします。

脚が表板にぴったりと接すれば、駒の裏面（テールピース側）が直角になります。駒の上面は少しカーブを描いており、A線は指板から約6mm、C線は約8mmが弾きやすい高さとなります。駒の正しい位置は、左右のf字孔の内側の刻み目を結ぶ線上です（モデルによって異なりますが、400~415mm）。駒は、魂柱、弦と並んで、音を左右する重要な要素です。

魂柱

イタリアでは『Anima（アニマ：魂）』と呼ばれていますが、その位置や長さ、太さによってチェロの音量が決まるという点においては、まさに楽器の魂と言えるでしょう。魂柱の調整は専門家にゆだねるべきです。音のレスポンスやバランスが思い通りにいかないと感じた時は、専門家に相談して魂柱の位置を調整してもらいましょう。

新しい楽器では木がまだ動き、板が弦に引っ張られがちなので、1年以内に少し長めの魂柱が必要となるケースがあります。魂柱を変えることで、楽器の状態と音（あなたが買うほど気に入った）に落ち着きます。表板と裏板のコンディションは、気候によって変化します。駒と魂柱を夏用と冬用にそれぞれ用意しても良いでしょう。指板上の弦の高さが高すぎる、または低すぎるようなら専門家に相談して下さい。

指板

弦を押し付けられてでこぼこになってしまうため、2~3年ごとに調整して完全に滑らかな状態にする必要があります。指板は中央が約1.5mmほどくぼんだ凹面（C線側がやや深め）となっていますが、たいていの場合、弾きやすいように駒側半分のみカーブがつけてあり、上側半分はほぼ平らとなっています。

糸巻き

季節によって糸巻きが固くて回らなくなったり、逆にゆるむ場合には、チョークや石鹸で調整をしましょう。

- ・ まず弦をゆるめて糸巻きの穴から糸巻きを抜き、糸蔵と接触する部分に石鹸を1~2往復そっと塗ります。
- ・ 糸巻きがゆるむ時にはチョークを、固くて回転しないようなら石鹸を塗ります。
- ・ 弦を巻いたら、糸巻きを糸蔵の奥の方までしっかりと差し込みます。

また、使っているうちに、糸巻きの軸の中心がずれて円形がゆがんでいきます。こうなったら、専門家にを見せて新しい糸巻きと交換してもらいましょう。古い楽器で糸巻きが短くなってしまった場合も同様です。糸蔵にヒビが入ったために、糸巻きがうまく固定されないこともあります。この時、糸巻きを穴の奥へと無理に押し込んでしまうと、ヒビが広がってしまいます。専門家に相談して、にかわでヒビを埋める、穴に輪を装着する、もしくは、十分な固定力を出すために一度穴を埋めて新しい穴を作るなどの修理をしてもらいましょう。

ノイズとうなり

原因のわからないノイズやうなりほど気になるものはありません。以下のチェックリストを使って、ノイズやうなりの原因を探してみてください。

- ・ アジャスターがテールピースに固定されているか
- ・ 板の縁をこぶして軽く叩き、表板と裏板に剥がれた部分が無いか（細工には十分注意を！）
- ・ ヒビが入っていないか
- ・ 指板上で4本の弦に十分な高さがあるか
- ・ エンドピンやテールピースがピリついていないか

クリーニング

楽器専用の「クリーニング液」以外のものは絶対に使わないで下さい。クリーニングの前に、まず楽器に修理が必要なヒビがないかどうかをチェックします。そうしないと、汚れがその割れ目に入り込み、修理の手間を増やすことになってしまいます。

乾いた綿の布（大判のハンカチ、Tシャツ等）にクリーニング液を一滴たらし、一部分をそっと拭きます。次に、布の汚れていない部分で磨きます。駒と魂柱付近は十分に気をつけて。クリーニング液の使用は、年に2度以内として下さい。日頃の手入れは、乾いた柔らかい布で行います。

Felix Krafftホームページ：www.felixkrafft.de

第9回 チェロサロン

9回目をむかえたチェロサロンは、鈴木秀美先生の主宰で開かれました。前半は、チェロの変遷をたどる古楽器のお話、休憩後の後半はクリニックを行い、江浦仁美さんと北村貞幸さんのお二人がバッハの無伴奏1番で受講されました。

8月4日、第9回チェロサロンが鈴木秀美さんの主宰で行われ、13名の方が参加しました。東京の蒸し風呂のような真夏の午後、正直あまりチェロを弾くのに相応しい季節とは云えませんが、何と云っても鈴木秀美さんの主宰ということで参加いたしました。

サロンは、前半がチェロの音楽の歴史や楽器の変遷についてのお話、後半が無伴奏組曲第1番を題材にしたクリニックでした。

鈴木さんは大変な博学。なかなか普段は聞くことができないチェロ音楽の歴史的なお話や熱心なクリニックで、予定の2時間を大幅に超えてしまいました。

最近「古楽ブーム」、ピブラートをたっぷりかけ豊かな音響で朗々と弾く「近代的演奏」に少々飽きが来たのか、はっきり時代は変わったと感じられるこの頃です。特に、去年はBach Yearで、私もBCJのコンサートをはじめ、たくさんの方々のBachの演奏会に足を運びましたが、その多くが、古楽器による演奏或いは古楽スタイルによる演奏でした。そんな訳で、私の耳もすっかりそういう演奏方法、音の響、音楽の語り口に馴染んでしまって、むしろ「近代的奏法」でのバロック音楽の演奏には違和感や疲れを覚える程です。

私の場合、全く自己流ですが数年前から、弓を短く持ったり、ピブラートをかけなくしたり、開放弦を積極的に使いなるべく高いポジションは使わないとか、調弦のピッチを低めにしたり、ガット弦を試したり、そして



何より弾き方を変えたりと試してきました。

そして、鈴木さんのリサイタルや昨年の無伴奏組曲全曲の6回のレクチャーなどはしばしば聴かせていただきました。鈴木さんがいろいろなもの書いていること、最近では「さらば古楽器よ」ですか。ほとんどI agreeという気がします。

そんな私の個人的な背景もあり、今回あつかましくもクリニックまで受けさせていただいたのですが、もっとたくさんの方がクリニックを受けられるのかと思っていたら、江浦さんと私の2人だけで、正直いって少々びびってしまいました。江浦さんは4本の弦全てがガット。演奏もビルスマ版に基づきアルマンドをきっちり演奏されました。

引き続いて、私はプレリュードを自己流に。ピッチは半音下げ、弓は短く持ち、G線だけガットで。弾き始めると緊張で右手のコントロールが利かずどうしようかと...。「やろうとしている方向は間違っていないと思う」と言われ、それだけでも多少の救いでした。

鈴木さんのお話にもありましたが、最終的にどういう音楽を奏するかは別として、やはり当時の仕様の楽器とかスタイルを学んでみることは、その音楽を理解する上でとても大切なことだと感深くいたしました。

これを機に、「語る音楽」へ更に心が傾いたのは私だけではなかったと思います。

最後に、このような貴重な機会を用意してくださった鈴木さんとチェロ協会の方々に心から感謝申し上げます。

R・160 北村 貞幸

第10回 チェロサロンのご案内

関西地区の方、大変お待たせしました!!

次回は、大阪にてサロンを開催します。

主宰は林俊昭先生です。

11月10日(土)を予定しておりますが、時間等の詳細はあらためてご案内致します。

音符の不思議

堀 了介

私は何時も不思議に思うことがあります。それは楽譜に書かれている音符です。一体「音符」とは何者であろうか？この単なる記号の中には実は無数の情報が詰まっていると思われま

す。私達演奏家は、バッハからベートーヴェン、現代の作品に至るまで、楽譜を読み演奏します。楽譜に書いてあるのは、音符と幾つかの記号、そして音楽用語です。しかし、実際に作品が演奏されると、同じ作曲家の作品であるのに、演奏家によって千差万別の音楽になって現れます。奏でる音は、演奏家自身の築き上げた技術の上に、それまで得てきた知識、体験が加わり、独自の音楽となるのです。

作曲家は、音符を記すことによって自分の想いを残します。音符は文字のように、それ一つでは単なる記号でしかありませんが、意図を持って配列されると、とたんに意味を持ち、息づいてきます。作曲家が何を音符に込めたか？私達演奏家は、文の行間を読み取るように、作品の音符の裏に込められているものを読み取る努力をしなければなりません。現在生きている作曲家の作品であれば、直接会って、作品への思い入れや要求などを聞くことも出来ますが、もうあちら側へ行ってしまった作曲家には、それは出来ません。

ではどうすれば...？ 私が一番大切にしていることは、音符を音にしながら、今、何を感じているかということです。作曲家が音符に託した思いを、音符を通じて私達演奏家が個々に感じ取って奏でるのです。初めに、作曲家が生きていた頃の時代背景、生涯、作品の成り立ちなどを頭に入れて曲と向かい合うのは勿論ですが、時代が変われば、同じ国でも環境や物の考え方も変わり、ましてや、楽器の性能、技術など、数百年前とは格段の差があるのです。今日に生きている私達は、私達なりに音符の裏側に隠れているものを読み取り、表現すれば良いのではないのでしょうか。

現在の私達の演奏をバッハやベートーヴェンが聴いたとしたら、「こんなはずではないぞ」と怒ることもあるでしょうが、「私の曲がこんなに素晴らしく演奏されている...」などと、もしかしたら喜んでくれるのではないのでしょうか。又、そう願って私も出来る限りの努力をし、より良い演奏をし続けるよう、偉大なる作品、ではなく「音符(?)」の為にも、頑張っていこうと思っています。

100年、200年先にはバッハ、ベートーヴェンや現代の作品はどのように演奏されているのか、聴いてみたいものです。

情報コーナー

■■■チェロ関連のコンサート■■■

NHK交響楽団 第1441回定期公演
9月19日(水)・20日(木)19:00開演 サントリーホール
出演：ヤーノシュ・シュタルケル(Vc)、他
【お問合せ】N響ガイド 03-3465-1780
定期会員の方の公演ですので、通常前売りはございません。当日券の有無に関しては、NHK交響楽団へご確認下さい。

ヤーノシュ・シュタルケル
9月28日(金) 19:00開演 カザルスホール
出演：練木繁夫(Pf)
【お問合せ】神原音楽事務所 03-3586-8771
9月25日(火) 19:00開演 トップアンホール
出演：堀米ゆず子(Vn)、練木繁夫(Pf)
10月2日(火) 19:00開演 トップアンホール
出演：練木繁夫(Pf)
【お問合せ】トップアンホール 03-5840-2222

東京交響楽団 第484回定期演奏会
9月29日(土) 18:00開演 サントリーホール
出演：クレメンス・ハーゲン(Vc)、他
【お問合せ】東京交響楽団 03-3369-1661

日本におけるイタリア2001年～日伊音楽交流事業～
「アルトゥーロ・ボヌッチ チェロコンサート」
11月7日(水) 18:30開演 鳥取市文化ホール
出演：ジュセッペ・カラベレーゼ(Vc)
ディレッタ・ダミーコ(Vc)
松浦ふさ代(Vc)
フェデリカ・ファゾーリ(Pf)
【お問合せ】松浦ふさ代 0857-22-5008
会員No.R-154松浦ふさ代さんの企画されたコンサートです。ボヌッチ氏はサンタチェチーリアアカデミーにて教鞭をとられ、松浦さんの師匠にあたる方です。他にも鳥取県内で3公演を予定しています。

チェコ・フィルハーモニー管弦楽団
11月12日(月) 19:00開演 サントリーホール
出演：スティーヴン・イッサーリス(Vc)、他
【お問合せ】梶本音楽事務所 03-3289-9999

スティーヴン・イッサーリス チェロリサイタル
11月13日(火) 14:00開演 トップアンホール
出演：児玉桃(Pf)
【お問合せ】トップアンホール 03-5840-2222

西村志保 チェロ・リサイタル
11月19日(月) 19:00開演 ザ・カレッジ・オペラハウス
【お問合せ】大阪音楽大学チケットOCM
06-6334-2242
会員No.R-186 西村志保さんのリサイタルです。

弦楽器の20世紀Vol.1
ジャン＝ギアン・ケラス チェロ・リサイタル
11月28日(水) 19:00開演 トップアンホール
【お問合せ】トップアンホール 03-5840-2222

事務局より

シュタルケル公開マスタークラス、
まだ間にあいます
整理券の申込切を9月17日(金)まで延長します。なお、当日券をお求めになる方は、必ずJCS会員証をご提示ください。

2001年度会費のご入金がまだお済みでないかたは、
早急に手続きをお願いいたします

【お振り込み先】

富士銀行 神谷町支店 普通 2712673
三井住友銀行 赤坂支店 普通 7909038
口座名義「日本チェロ協会」

銀行からご入金を頂いた方は、振込み控えが領収書の代わりとなりますので大事に保管ください。
現金にてお納め頂いた方は、事務局より領収書を送付致します。

名簿の訂正

すでにお配りしております2001年度会員名簿に誤りがありましたので、訂正をお願いいたします。

会員No.R-172 山口浩史さんのe-mailアドレス

(誤) yamaguchi@hotmail.com

(正) yamaguhi@hotmail.com

JCSニュース 次号発行スケジュール

原稿締め 11月30日 発送 12月28日

コンサートのちらし等の同送をご希望の方は12月15日までに事務局宛にお送りください。

編集後記

7月の国際チェロフェスティバルで神戸に行く機会を得ました。まだ神戸はビギナーのため、まずは基本を押さえておこうと、かの神戸牛にトライするべく鉄板焼に行ったところまでは良かったのですが…。スキヤキのような“たれ系”は別として、この場合、お肉そのものを味わおうと思ったらステーキにするべきでした。薄切肉十分おいしかったのですが、なにかちょっと物足りない気が…。
店内を見回すと、薄切肉を頼んでいるのは私のみ。たまに奮発しても、日頃の貧乏性が染み付いて贅沢しきれないことを実感しつつ、悲しくお肉をかみしめたのでした。

日本チェロ協会会報 (JCS NEWS) 第12号

2001年8月31日発行

発行：日本チェロ協会

東京都港区赤坂1-13-1 サントリーホール内

電話 03-3505-1001 FAX 03-3505-1007

発行人：堤剛

編集：日本チェロ協会事務局

編集協力：リュウカンパニー